



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	創造社脱退前後の郁達夫
Author(s)	鈴木, 正夫
Citation	北海道大學文學部紀要, 24(2), 103-146
Issue Date	1976-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/33399
Type	departmental bulletin paper
File Information	24(2)_PR103-146.pdf



創造社脱退前後の郁達夫

鈴木正夫

創造社脱退前後の郁達夫

鈴木正夫

国共合作の成功による国民革命の昂揚と挫折、その後にもたらされた四・一二クーデターに象徴される反動、弾圧の嵐、そしてそれに対抗するための「左連」（左翼作家連盟）の結成と続いたこの一時期は、まさしく「疾風怒濤時代」であり、中国の作家それぞれの身の処し方に、その作家の生き様サマというものが端的に表われ出たと思われる。本稿は私が年来関心を抱いている郁達夫について、まず創造社脱退前後に的をしぼってそれを跡づけし整理してみようとしたものである。

一

郁達夫が郭沫若、王独清とともに広州に着いたのは、一九二六年三月二三日のことである。

当時の広州を中心とする南方は国共合作による革命の策源地であった。従って北方の軍閥支配下にあった知識人等でここを新生の地と見なしてやって来るものが多かった。

元来達夫が広州に来たのは、郭沫若の斡旋によるものであった。この年二月ごろ、郭沫若は広東大学から、文学院

創造社脱退前後の郁達夫

長として招聘を受けた。彼は、当時偶々失業中で専ら創造社の仕事に携っていた達夫とフランスから帰国したばかりの王独清の二人を誘い同行させたのであった。それより先すでに張資平と成仿吾が広州にいた。さらに一、二か月後には穆木天、鄭伯奇も相繼いで広州入りし、創造社の中核がそっくり広州に移ったといつてよかつた。

達夫が広州に在った期間は極く短い。同年六月半ば、北京に妻とともに残っていた長男発病の知らせを受けて北京に帰り、すでに他界していた長男を弔った後、一時上海に立寄り、広東に戻ったのが十月下旬、そして上海の創造社出版部整理の仕事を託されて広州を発ったのが十二月半ばのことであるから、実際にこの地に滞在したのは、四か月余りにすぎない。

しかしこの間に達夫が受けた衝撃は、彼の期待するところが大きかっただけにまた強烈であつた。彼は前年武昌師範大学の教授に任ぜられていたが、派閥紛争に巻きこまれ、また病を得たりしたため、身心ともに疲弊した状態にあつた。彼はその間の事情を後に次のように述べている。

旅に病臥すること半年、精神がやや恢復したとき、私は二、三人の友人と旅支度を整え、革命策源地の広州に着いた。そこでもととは旧習を改め、満腔の熱誠、満懷の悲憤を、すべて革命の中に投じようと思つたのだ。

誰か知らん妖怪が旌旗を弄ぼうとは。そこで見たものは、これまたただ陰謀詭計、卑劣汚濁であつた。一種の幻想は、子供が吹いて遊ぶシャボン玉のように、半年を待たずして、現実の惡風に吹き破られた。この間に文章は書かなかつたけれども、中国人の心の死滅、革命事業の成就し難さに対しては、一層の確信を添えた。⁽²⁾

一方、行動力のある郭沫若は、達夫の留守中の六月、文学院長代理の職を王独清におしつけ、自らは国民革命軍に加わる。その革命軍の中に彼もまた多くの投機分子の暗躍を見たり、右派からの妨害等の苦い経験を嘗めたりして、

文筆生活に帰ることも考えるが、結局彼の場合はそのまま翌年十一月に上海に潜入するまで前線で革命活動が続けた（上海にたどりついたとき、すでに彼は蔣介石から逮捕状を発せられていた）。

魯迅はどうであったか。彼は二七年一月一八日、廈門からこの「革命策源地」の広東に到着した。そこで彼もまた「二か月住んで、私は驚きました。というのはかつて聞いたことは全くのデマで、この地方はまさしく軍人と商人の主宰する国土でした」というような経験をするのである。

辛亥革命によって満州王朝は倒されたが、それにとって替わったのは軍閥であり、蹂躪された一般民衆の生活は一向に改善されないばかりか、うち続く軍閥間の抗争は一層民衆の被害を増大させていた。そうした民衆の絶大の期待を受けた革命勢力（現にそのために北伐は迅速に成功した）の中に、実はその理想からかけ離れた腐敗分子の混じることは、革命勢力を構成するものの中に旧軍閥出身者が多いことから、むしろそれは当然のなりゆきであった。

達夫の指摘したのはまさしくそうした現実であったのであり、特に上海に帰って間もない二七年一月七日に執筆し、曰婦のペンネームで自ら編集していた『洪水』二五期に発表した「広州事情」が、後に達夫が創造社を脱退する一因ともなったのだが、従来日本ではこの内容について、彼が上海に舞い戻ったことと絡みあわせて誤解している向きが多いように思う。

例えば次にあげる小野忍氏の一文などもそうした印象を与える（後の方の記述とも関係するので、こことは直接係わらないところまで引いておく）。

……郁達夫はこれよりさき「創造月刊」第六期の編集を終えたあと、成仿吾、王独清らと衝突して、創造社を正式に脱退し、以後魯迅に近づいた。この作家はその不幸な生涯を通じて前進と後退を時計の振子のように繰り返

返した。彼は一九二六年三月、郭沫若らとともに広東に着いたとき、「この地で自分の旧習を改め、滿腔の熱意と憤りを革命に向かって集中するつもりであつたが、……そこで見たものは陰謀と汚濁にすぎなかつた」（『鶏肋集の題辭』一九二七年八月一日執筆）。一九二六年末、上海に帰ると、彼は「広東事情」（『洪水』第二五期。一九二七年一月）を書いて革命運動をのしり、続いてまたプロレタリア文学に反対する文章を書いた（『プロレタリア独裁とプロレタリア文学』『洪水』第二六期。一九二七年一月）。しかもそれから数カ月経て、「四・一二クーデター」が起こると、その発頭人の罪惡を糾弾する言葉を日記に連ね、また中日両文でしたためて、日本の「文芸戦線」誌に送った。それは「日本無産階級文芸界同志に訴う」と題する文章で、同誌の一九二七年六月号に載った。⁽⁴⁾

「革命運動をのし」つたという「広州事情」で達夫は一体どんなことをいつているのか。その概略を次にやや詳しく述べてみよう。

中国では辛亥革命以来、度々戦乱があつて、人民は安穩に暮すことができなかったが、中華民族は死に絶えることはなかつた。幾度もの試練にもかかわらず、表面上は少なからざる挫折を受けたけれども、一般国民の思想、行為は、やはり新しい方向に着々と進歩している。

中華民族の進歩の証拠を要求するのであれば、広東を見てみればよい。中山先生の広東経営以来、いくばくかの時を経て、現在の東南の天下は、すべて彼の感化を受けている。しかし、理想や欲望は實際の進歩よりはるかに先を進む。そこで、文化批評家、政治批評家はその理想と現実とを比較検討してみなければならぬ。それが社会の進歩と極めて大きな關係を持つのである。

広州の情況は表面上は、すでに我々を喜ばせることができる。しかし、ここではかつて多くの民衆の膏血が犠牲とされたのだ。この膏血は一人の政府の人物に吸収され、一方広州の街上には立錫の余地のない幾多の窮民がいる。これらのことはまだ小事であつて、まずしばらく広州の政治、教育、農民労働者階級の現状を見た後、概括的批判をするしよう。

第一に広州の政治についていえば、政府の部長、庁長クラスの人は、もちろん清貧である。彼らはさして高給を受けているわけではなく、地位柄支出が多である。二三、外部からとやかくいわれる人もあるが、総じていえば、広州中央分府、省政府中のトップクラスの私的収入は、北政府の官僚に比べて、ずっと進歩している（公明正大であるということか——鈴木）。その下の秘書、科長クラスの利害は、おおむね上の一クラスと通じており、もしも革命政府と省政府が、人民の搾取について、青天白日の下に持ち出すことができないならば、これらの暗黒の罪悪は、すべてこの階級の上に帰せしめねばならない。なぜなら暗暗裡のたかり、表面的粉飾はすべてこの階級がしでかしたものであるからだ。その他の役所や小団体の暗黒については諒としなければならぬ。それはすぐに旧習を改めるのは容易ではなく、自ら倒れるのを待つか、積極的に二回目の清掃をするよりほかない。

政治の中心にある人物の施政の思想について。国民政府は、国民の政府であり、人民の為に利益を謀る政府であり、その基礎は国民の全体の上に築かれている。しかし実際に国民政府内の政治を左右するのは、民衆と係わりのない数人にすぎない。また民衆の代表も先ず軟化を示さなければ圧迫を受けて身を容れることができない。国民政府の中には、役人をしているものと、実際に仕事をしているものとがいるのだ。役人をしているものは上

を承けて下を敷き、事をきれいにやりさえすればよいとする。中にはスローガンは民衆の為に幸福を謀る、だが、真に民衆の為に幸福を謀ろうとする人には、少しも目をくれようとせず、時には権勢に附和して民衆を圧迫する。こういう一派の勢力は最も大きく、位置は最も固く、現在の政治舞台上の人数も最も多い。また不可解な最高機関の命令や独断専行の人情から離れた行為はこういう一派の献策によるのだ。国民政府の中に左右両派があるというのは、ばかげた話で、実際には一派のみが威勢よく事に当っており、その他の一派の勢力はとつとく消え失せてしまっている。

それではいわゆる左派の努力（原文：努力）は完全に失墜したのだろうか。それも違う。物理上のエネルギー不滅の原則は、政治上でも応用される。現在民衆はすでに目醒めた。労働者の組織も日ましに堅強完全になった。利用されることの回数が積み重なるにつれ、利用される者の経験知識も当然すでに進歩した。彼らの勢力は死滅せず、彼らの工作はなお有効である。しかし現在は立ち上って総決算をする時ではない。彼らはなお社会の下層に潜伏して、基礎建築のセメントを作っているのである。

党化教育は、今日の状態の下では誰もが賛成する。しかしこの党化は公明正大な大多数の民衆の党化ではなくて、依然として幾人かの勢力のある人が舞台裏であやつっている党化である。そして学生はすべて旧勢力の下に屈伏せざるを得なくさせられている。その上目下の遷都政権移動の時にあっては、すべてが中途半端であり、広州の教育は現在も完全になお冬眠状態にあり、何もかもが停頓し、何もかもがない。そこで「冬来たりなば、春遠からじ」という英国詩人の至言を広州の学生が忘れないことを希望する。

広東の農民労働者階級は、表面上活気があるようだが、その結束力は弱い。運動の指導者は小政客の出身で、

一部分の人の手先となって同類の人々を虐待することもある。そのために労働組合同士が衝突したり、同一労働組合内で兩派に分れて闘争したりすることもある。農民、労働者を基礎とする国民政府の下で、このような事実の発生が見られることは、少なくとも首領たる人物の反省自責すべきところであり、野心家がおおその間に立って利用し、それによって地位と声望を築こうとするのは、世界革命の一大恥辱ではなからうか。

達夫はこう広州の各界の状況を述べて来た上で、次のように結んでいるのである。

広州の情況は複雑であり、事實は不可思議で、多くの軍事、政治に関する具体的な話があるが、目下の状態の中では、記者は敢えて語らないことにする。要するにこの度の革命は、依然として我々の理想にはほど遠い。我々民衆はなお我々の利益を争うために奮闘しなければならない。現在是我々の力を尽して第二次工作の準備をし、必ず目下のこの畸形的過渡現象をして、なるべく早く消滅せしめなければならない。しかし我々の共同の敵が、まず打倒されない間は、我々は理想を犠牲にし、しばらく沈黙し、一致して初步的工作をしなければならぬ。最後はやはり中山先生の二句、「革命未だ成功せず、同志なお須らく努力すべし」である。

ここで達夫は、最初に中華民族の進歩の証拠として広東を見よといい、あくまで革命は欲するが、しかしその革命の実情が理想からほど遠いから、民衆はなお努力を継続せねばならぬということを訴えているのである。少なからざる暴露はあり、従って彼としては珍しく筆名を使ったのだろうが、それはあくまで「畸形的現象」を矯めることを意図したもので、暴露のための暴露ではなく、筆調も個人の憤懣や幻滅を極力抑えて全体に穏やかである。また彼は自分は革命に失望したから手を引くなどとも少しもいっていないのである。彼が「ののし」ったとすれば、それは革命を利用しようとする政客ゴロツキであり、それらによって構成される辛亥革命以来の混乱の延長としての「革命政

府」(従つてそこには当然のように程度の差こそあれ、軍閥政府内部が抱えたと同様の、革命を投機と考えるような宿命的腐敗が見られた)であつて、「革命運動」そのものではない。達夫としては書くべきものを書いたという心境であつたろう。日記によると、しばらく前から『洪水』の原稿として腹案を練っていたらしく、実際に書きあげた一月七日の日記には、「朝目さめてみると、頭がすっきりしている。筆を取り上げて『広州事情』四千余字を書いた」とあつて彼の満足の意が窺えるようだ。

そして十日後の一月十七日に『洪水』二六期の原稿としてやはり曰婦のペンネームで書いた「無産階級専政和无産階級の文学」は、「広州事情」との内容的関連において見逃すことのできない重要な文章である。これもその要旨を紹介してみよう。

中国では長く帝政が続き、一人のために全民衆が犠牲となつてきた。辛亥革命後は、少数のものと外国の資本主義とが手を結んで、軍閥、官僚と外国資本家の独裁の世となつた。

そこで多数の民衆が立ち上つて、民衆の幸福、利益を奪い返そうとした。ところがこんどは新しい軍閥、官僚と資産階級が現われ出た。

現在中国政治の舞台で活躍しているのは大抵小資産階級の出身であり、前期資本主義の訓練を受けたものが多い。彼らは民衆を利用してより強大な旧階級を倒すと、大多数の民衆を圧迫するようになった。

真正の徹底した革命は無産階級者つまり労働者と農民が主人公とならなければ成功し得ないものである。そこで一つの革命の過程で、我々が望むのは、第一に無産階級の独裁である。換言すれば、つまり新軍閥、新官僚、新資産階級の打倒である。

無産階級独裁が実現するまでは、無産階級の文学も生まれない。なぜなら無産階級独裁が完成されなければ、無産階級の自覚意識はありえないし、自覚意識のない階級文学は成立し得ないからだ。また文学は社会の薫育によって生まれるものであり、無産階級独裁が完成しない時は、その社会の教育、施設、要求は無産階級文学とは、相反するものであるからだ。

現在の中国には、外国の思想を引き写したり、無産階級の文学を大呼したり、模倣焼き直しをしたりして無理やり似て非なる無産階級の作品を作り出している人がいるけれども、心を労してもいい作品はできず、一つとして成功するものはなく、それは自己に忠実な行爲ではない。私はここであえて断定する、真正の無産階級の文学は、必ず無産階級自身によって創造せねばならず、この成功の日は必ず無産階級独裁の時である、と。

先に引いた小野忍氏の論文では、この達夫の評論を「プロレタリア文学に反対する文章」としているのはどういふわけだろうか。達夫がここでいっているのは、労働者・農民が中心となつて、この「革命」で抬頭した新軍閥、新官僚、新資産階級を打倒し、真正の無産階級の独裁を実現させなければならないし、また真正の無産階級の文学も彼らの手によって創造されなければならない、ということなのである。

達夫が、「外国の思想を引き写し（原文：抄襲）たり、無産階級の文学を大呼したり、模倣焼き直しをしたり（原文：模倣焼直）」といっているのは、例えば、二六年五月一日に発行された『創造月刊』三期に載った郭沫若の「革命与文学」やこれは未見の前号の『洪水』（二五期）に載せられた成仿吾の「完成我們的文学革命」などを指しているのかも知れないが、革命文学論争の発端となつた成仿吾の「従文学革命到革命文学」が発表されたのは二八年二月発行の『創造月刊』九期である。従つて達夫のこの評論はそれより一年も早く発表されているのであつて、後のいわ

ゆる「プロレタリア文学」とするにも時期的に合わないように思う。

要するに、「広州事情」も「無産階級専政和无産階級的文学」も、広州の「革命」の現実に幻滅した達夫が、それであるからこそ、新興の軍閥、官僚、資産階級を打倒する真正のプロレタリア革命を呼びかけたものであるといえるのである。

従つてまた「無産階級専政和无産階級的文学」を書いて三か月余り後の四月二八日、次のような声明文「訴諸日本無産階級文芸界同志」を日本の雑誌『文芸戦線』（四巻六期）に寄せたとしても、それは何らの矛盾でもない、当時の達夫の一貫した心情であつたのである。

中華民族は今や、一種の新らしい圧迫の下にあり、その苦悶は前よりも更にひどい。今、我等は集会、結社の自由を有せざるばかりでなく、言論の自由さへも、彼等新軍閥に剝奪された。蔣介石の頭脳から、封建時代の思想が除かれず、今度の中華民族解放運動の成功せんとして、また失敗したのは、その責任は全く蔣にある！

蔣はいま、更に英国帝国主義者と日本の資本家及び支那旧日の軍閥と官僚と一氣聯合して、極力高圧政策、虐殺政策を敢行してゐる。

我等は想ふに、蔣介石の如き新軍閥は昔の旧軍閥よりも更に我等の国民革命に妨害することが多い。支那民族の全民革命が若しも成功せざれば、世界〇〇も従つて起り得る筈がない。無産階級者はたゞ階級あるを知つて、祖国あるを知るべからず、就中、プロレタリア文芸戦線戦士は国境の觀念があつてはならない！

今、日本の無産階級は正に、その全力を尽して支那の無産階級を援けなければならぬ！正に日本の軍閥と資本家の迷夢を呼び醒して、彼等の蔣介石或ひは張作霖の援助（原文：幫助）を阻止しなければならぬ。過古の半歳

のうちに、日本の無産階級が我々を助けたことを我々は之を充分に認め、こゝに謝意を表さなければならぬ。今後も我等は更に密接なる提携、強烈なる互助を望むものである。

さうすれば、世界の被圧迫的民衆が、みんな自由を獲、平等を得て、一個の無産階級〇〇〇〇〇〇を造り出し得るかも知れない！

右のような事情であるから、この時期の達夫の言動に限っては「前進と後退の時計の振子」と小野忍氏が喩えるのは、全くあたらないように思う。

ところで、「広州事情」については早速郭沫若や成仿吾の非難を招いた。

二月十二日の日記にいう。

郭沫若の手紙を受取る。『洪水』の「広州事情」で私の傾向が大変悪いと責めている。彼は右派に籠絡されようとしているのではないだろうか。将来我々二人は、あるいは袂を分つことになるかも知れない。

同じく三月八日の日記には次のように書き記す。

仿吾の来信に接す。沫若が彼にも手紙をやって私の書いた『洪水』二五期の「広州事情」をのしつたそうだ。沫若はその地位の關係から、某某らに附和せざるを得ないという彼の苦衷はよくわかる。この手紙と仿吾の書いた短文「読広州事情」⁽⁶⁾を読んで、大変不愉快になる。いまは民衆に代つて語る時であつて、軍閥に附和したり、新軍閥、新官僚が奪権争いをする時ではないと思う。

達夫は非難を受けるのがいかにも心外といった様子である。それを当時国民革命軍政治部副主任であつた郭沫若は後年次のようにいっている。

創造社脱退前後の郁達夫

彼は「日帰」の筆名で『洪水』半月刊に「広東事情」を書き、思い切って広東方面の人の意に満たないところを暴露した。私は妥当ではないと思ひ、仿吾と達夫にそれぞれ手紙を書いて意見を示した。その時上海はまだ孫伝芳の管制下にあり、広東の状況がよしんば人の意に満たないにしても、やはり革命の大後方であり、敵の管制区域ですつば抜きをするのはまずい。まして創造社の友人たちが広州に集中しており、私は前線にいたのであって、我々の歩調がこう一致しなくては、みんなを居づらくさせてしまう。しかしこの手紙がきっかけとなって、後について達夫は新聞に声明を出して創造社を離脱してしまうことになった。

「広州事情」は上に紹介したように決して暴露を目的としたものではない。従つて反革命的文章でもない。あくまで革命の策源地広州の腐敗の肅清と本来の民衆のための革命政府となることを希望して書いたものだ。だからここで達夫が齒に衣を着せて、奥歯にものをさはめたようないい方をしている。その実体を、例えば当時広州の政府部内かその周辺にあつた人ならば、掌を指す如く理解できたはずである。それが我々にはわかりにくい、達夫と同じころ広州の女子師範に勤めていた許広平の、『両地書』に収められた魯迅あて書簡を読めば、学生との間にすら腹のさぐりあいをしなければならないという当時の、およそ理想とはかけ離れた革命策源地というものの複雑怪奇さの一面が、ある程度は察することができ、延いては達夫の思ひつめた心中をも忖度はされよう。

ところで一方郭沫若は、野宿をし、南京虫の大群に攻められ、砲弾の下を何度もかいくぐり、屍を越え、行を共にした戦友の死に遭遇しつつ、革命軍の前線に従つていた。その彼にしてみれば、達夫のこの行為は後方にいて例によつて勝手な熱を上げていると受け取れ、怒り心頭に発したとしても、これまた当然であつただろう。さらに彼もまたこの革命や革命軍なるものの実体が、「フン、国民革命！何人かの投機的腐敗紳士を新官僚にするに過ぎないのだ」

「目の前のこんな半死半生の羊頭狗肉の革命は、全く耐えられない」、「三分は革命のためにし、七分は役人となるためにする」ものだと感じていただけに、その要職にあった彼としては、かつての僚友から自分もまた投機分子の一人として揶揄され非難されたと受け止め、一層態度を硬化させたということも推測できる。

いずれにしても、結果的には、その後革命政府はひたすら反動化の方向に進み、郭沫若はお尋ねものにすらされ、創造社の他の同人もそれぞれに足場を失なうて、上海に帰るに至った。いつてみれば、達夫のこの政府の体質に関する懸念は的中したわけで、その意味では先見の明すらあったともいえるのだが、それについて王独清は次のようにいっている。

達夫が『洪水』上に仮名で発表した「広州事情」は、かつて郭沫若と成仿吾の非難をひきおこし、成仿吾はこれに反駁する文章を書いて『洪水』に載せ、郁達夫が反対した広東政府のために弁護した。このことについて我々は現在も全体的政治の立場から批評する必要はない（なぜなら我々の全体的政治の立場からいえば、それはとつきの昔に反対すべきであつた）、ただ当時の情勢から論ずれば、郁達夫の反対したのはまさしく広東政治の右傾後の政府である。その時創造社の同人はほとんどすでに広州に立脚できなくなつていて（広東大学の大変高い塀の上に張られた私を打倒せよという標語は多分いまもまだ残つていよう）、清党の風雨はすでにしだいに気配を表わしており、郁達夫はおそらくわずかにその直覚に頼つて上海に帰つてからあの文章を書いたのだ。もとより、あの文章を根拠として郁達夫が何らかの政治主張を持つていふとすれば、それはばかげている。なぜなら郁達夫というのは全く政治のわからぬ人間なのだ。しかし当時このことで郁達夫に不満であつた人が、それも愚かなのだが、もしも再び今になってこのことをもつて伏線（原文：張本。達夫が後に反動的になつ

創造社脱退前後の郁達夫

たことの伏線という意味か——鈴木」とするなら、それは全く故意に事実を歪曲することになる。⁽⁹⁾

これを王独清が書いているのは、三十年九月で、すでに郁達夫と仲たがいでいてやや久しく、彼についてはひどい悪罵がほかにも多く見られるが、それにしても彼の「広州事情」に対する見解も、事の一半は物語っている。

日本で従来「広州事情」に対する誤解ないし理解の不徹底があり、延いては達夫の革命観に対する判断の誤りがあったのは、これが達夫の作品集等には一切収録されていず、原載雑誌『洪水』二五期もどこの研究機関にも所蔵されておらず、従って人々の目に触れることがなかったと思われる上に、引用した郭沫若の「再談郁達夫」などによって、一方的にその内容を押し量ってしまった結果によるものではないかと思われる。

二

達夫は二六年の暮もおしつまった十二月二七日に広州から上海に戻った。

彼が上海に引き揚げたことを、これも「広州事情」などとの関係からか、次のように説明するのが、これまで日本で一般的のようである。

二六年郭沫若らの同志とともに革命の中心地広東に乗込み、広州大学の教壇に立ったが、同年の末には上海に引揚げた。革命の表面に現われた醜さに繊細な神経が堪えられなかったからである。⁽¹⁰⁾

その月、広州大学教授に招かれて、郭沫若、王独清とともに革命の中心地広東へ行ったが、革命運動の現実に幻滅を感じて十二月上海へ帰り……⁽¹¹⁾

しかし、彼が上海に舞い戻ったのは、広州の革命の現実とは直接には関係がない。

その間の事情については、二六年十一月二日の日記にはっきりこう書かれている。

午前仿吾が黃埔からやって来て、東山の王独清のところへ行つて彼を待つてくれという。十一時まで待つと彼がやって来た。みんなで創造社内部を改組する件を話しあう。創造社は元來私と資平、沫若、仿吾の諸人が慘澹して運営したもので、いまは彼らに評判を踏みにじられてしまった。みんなで會議した結果、私が総務理事を担当し、最短の時間内に上海に一度行つて、預金を精算し、内部を整理することに決定する。私は二週間後に上海へ一度行くつもりである。現代青年の信頼できないこと、自私自利は全く私の意思の外に出、実に中国は救えないと思つた。

これに先立つ十七日の日記にはこうある。

仿吾が私に上海へ行つて出版部の方を専らやつてくれるようにいうが、私の気持は決まらない。

王独清によると、主要社員が広州に去つたあとの上海の創造社出版部は、周全平がきり廻し、潘漢年等を招き入れ、技術的工作をさせていたのだという。⁽¹²⁾留守を預つたその周全平は王独清にこう評価されている。

創造社出版部の成立は、無論どうであれ、周全平の功勞ということになる。というのは、当時一切の奔走の勞は全く彼が担当した。周全平は大變優れた実務家で、彼の創造社出版部に対する尽力を、我々は忘れるべきではない。⁽¹³⁾

實際、『洪水』の発刊からその編集、創造社出版部の組織等に周全平が注いだエネルギーと情熱、そしてその果たした役割のほどは、「關於一週年的洪水」からもよく窺える。

創造社脱退前後の郁達夫

ところが、勢いに乗った周全平、潘漢年らは、別に自分たちだけの組織を作り雑誌を発行するようになった。⁽¹⁴⁾ 成仿吾は、最も強硬なこれに対する反対派であり、王独清自身も後述する通りこの問題を解決しなければならないと積極的に主張した一人であったと自らいっている。そこで前述のような相談の結果、達夫が派遣されて本拠地に帰って来たという次第であった。特に彼が指名されたのは当然といえば当然であった。⁽¹⁵⁾

達夫が上海に戻って六日目の二七年一月二日の日記には早くも、「十時ごろ出版部に行き、ざっと帳簿を調べ、また社内(16)の小出版物の問題を解決する」という記述が見える。

王独清は「郁達夫は上海に着くと果せるかなこの決議にもとづいて、徹底的にいわゆる番頭（原文：小夥計）と分家（原文：分家）した」と書いている。達夫自身の日記からは、具体的なことはよくわからぬが、若手の社員と衝突しては、「心の中が一層憂鬱になり、一層中国人の根性の卑劣を感じた」などということを繰り返したようだ。そして二月十七日の日記には、とうとう会計上の不正を発見したことを記している。

別のところで達夫が書いている文章によると、彼が上海に帰ることになったのは、次のような消息が彼らのいる広州に伝わってきたからである。

彼らはすべて創造社出版部の勤務員で、建物に住み飯を食ってそれを給料で計算しない上に、彼らの出した書籍と雑誌の包装保管そして印刷の校正等の営業雑費をすべて創造社が負担し、これらの書籍と雑誌の純益は、すべてこの別の一社が受取っている。その結果創造社は別の一社を養うために基金を消費するはめになってしまった。⁽¹⁷⁾

会計上の不正の発見というのは、これらが事実として確認されたということだろうか。そしてこの結果によるもの

か、三月末ごろまでには、周全平、葉靈鳳、潘漢年が創造社から追われたか、あるいは彼らの方から飛び出してしまったかたらしい。三月二十八日の達夫の日記に「以前出版部で使った何人かのチンピラ（原文：壞小子）は、手段を講じて私をおとし入れようとしているようだ。というのは、私が彼らの出していたサマにならない半月刊を停止したのが原因だ」とあって、それ以後それまでしばしば見られた周某某、葉某という語が見えなくなっているからである。その上二七年三月十三日に書かれた「創造社出版部の第一週年」⁽¹⁸⁾には、「現在我々出版部の仕事は、私一人が責任を負ってやるようになった」ということばも見える。つまりこのころまでに「創造社内部を改組する」件はほぼ所期の目的を達したと覚しい。

ところで、潘漢年らの創造社からの脱退は、これを郁達夫との思想傾向の相違に因を求めようという論があった。例えば郭沫若は、達夫が創造社を改組し、周全平、葉靈鳳、潘漢年らを社外に追い出したのを、無産派と有産派の対立の表われだといっている。⁽¹⁹⁾一方王独清はその間の事情について次のように述べている。

誰かがその時周全平、潘漢年等に革命的表現があり、郁達夫は反革命なので彼らを駆逐したといおうとするなら、それはただ後日になっての人を欺く語である。潘漢年が出版部で無聊の書籍を翻刻したのを、郭沫若はやはり自らすすんでこのようなのは駆逐しなければいけないといった。その後で小組織の問題が発生し、成仿吾はしばしば周全平が「拆橋派」だと罵った。これは勿論「過河拆橋」（目的を達した後、援助してくれた人を蹴とばす意——鈴木）の成語を用いたもので、意味は周全平の「叛乱」ということである。言うまでもなく私はすでにして上層分子の一人であり、この種の意識は当然私も免れない。この問題を解決しなければならぬということについては、当時私も積極的に主張した一人で、つまりはこの件は決して郁達夫一人の上に帰することはできない

創造社脱退前後の郁達夫

い。潘漢年の現今の変転によって、故意に過去の事実を顛倒させることは、一層できない。当時創造社は無論上層分子といわゆる「番頭」とがともに出版部を握ろうとした。これは利害の争いに過ぎず、革命だとか反革命だとか言うものではない。

おそらく達夫等としては、まだ明確な文学上の主張を持った文学団体もさしてなかった時代から、営々として育てあげ、ある程度の地歩を築いた創造社が、若手社員に土足で踏み込まれたあげくの果てに乗っ取られたという思いを味わされたのである。しかし『洪水』の発刊、編集や出版部の組織における特に周全平の働きを考えるなら、その間上海を留守にしているほとんど手を貸そうとしなかった達夫等がこの期に及んで、主導権の引き渡し云々をいい出したとすれば、それについては無理があり、若手社員が反発したとしてもそれも当然のなりゆきといえよう。あまつさえその出版部の仕事を「私一人が責任を負ってやるようになった」といい出せば、これは達夫の側の乗っ取りといわれても仕方のないところであらう。

要するに彼らの間の争いは、とりわけ世代の相違による文人同士のセクト主義の表われにすぎないといえよう。この時期は達夫も含めて古参同人、新参同人ともに左傾しかけていたころであって、階級意識の相違による対立だとするのは、後年の傾向をその時期に持ちこもうとする、ためにする議論であり、実体がそのようなものでなかったのは王独清のいうとおりであったはずである。この当時の潘漢年の思想傾向がどんなものであったかは不明だが、「關於這一週年的洪水」（二六年十月一日執筆）の中で周全平が述べているプロレタリア文学観などは、達夫が「無産階級専政和无産階級的文学」に書いていることと何ほどの相違もないのである。

上海の古巣に戻った達夫は、こうした「創造社内部の整理」の仕事に携わるかたわら、『洪水』、『創造月刊』を編

集し、『新消息』⁽²⁰⁾をも創刊し編集したようだ。創作面でも、周作人から、作風が変り、ドストエフスキーやガルシンにも比べられるといわれた傑作「過去」を著した一方では、駄作「清涼的午後」等を書いたりもした。全集出版の準備もした。本もよく読んでいる。上海法科大学でドイツ語も教えている。また一方で王映霞を知って愛し合うようになり、六月には結婚を発表した。世情は騒然とし彼もデモに加わった。それらが交々重なって多忙であった。

ところで、その間『洪水』二九期の原稿として四月八日に書いた「在方向轉換的途中」は、彼の当時の革命観を知る上でこれまた見逃せぬだけでなく、創造社脱退とも係わりを持つことになった問題の一文である。

彼はここでまず冒頭において、目下の中国革命が、事実上どんな状態に変わってしまったかは、暫らく論じないが、大衆の努力目標は、少なくとも精神上次の三点を認めなければならないとする。

一、今回の革命は、中国全民衆の解放を要求する運動である。

二、今回の革命は、マルクスの階級闘争理論の実現である。

三、今回の中国革命は、世界革命の第一段階である。

従ってこの革命運動は以前の情勢とは三つの点で異なるとする。第一には、中国の全民衆は、直接間接に革命運動に従事している。第二には、今回の革命は、少数者が発動するものでもなければ、少数者の手によって成就されるものでもない。第三には、今回の革命の最終理想が完成するまでは、革命運動は停止されえない。そして、今回の革命の障害物は帝国主義者であって、かれらが懸命に活動し挑発しているが、その害はまだ小さく、目下の革命運動の最大の危険は、やはり中国人の脳裏から洗滌されていない封建時代の英雄崇拜主義（原文：英雄主義）である、とする。

その次には、武器を持った階級は危険性があり、従って革命の軍隊は、革命に対してよく理解していないと民衆の新しい圧迫者となる、と説く。そこでそうした危険な過程にあって、民衆の取るべき道は二つしかないという。一つは、革命の武力の中心を民衆に奪い返すことであり、いま一つは、手だてを講じて封建時代の遺した英雄崇拜主義を打倒することである、と。

また目下の世界の潮流の中にあつては、一人二人の英雄が民衆を指示し利用することは万々できないと断言し、真に時務を知った革命指導者のあるべき態度については、こう述べる。一步も民衆から離れず、民衆の利害を利害とし、民衆の敵を敵とし、万事民衆の指揮にまかせ、民衆の命令に服従するべきだ、と。

さらには、もしも一人二人の英雄があつて、これを迂闊の談となすなら、個人の高圧政策がどれほど続くかしばらく見てみるとよいと述べ、最後はこう反省を促している。

いわんや現在の中国革命は、なお一半を成就したのみで、あるいは功を一簣に虧くことになるかも知れない現在、不幸にして上に挙げた暗黒行為が出現している。そうだとすると今回の革命は、全部が烏有と化するであらうのみならず、世界の圧迫された民衆も我々の影響を受けるであらう。私はみんなが努力し反省し、中国民族を世界の笑い草とならしめないことを希望する。

これを書いた日の日記には、「朝起きると、ひどく頭が重く目まいがする。『洪水』二九期の原稿を渡さなければならぬので、『方向轉換的途中』を書く」とあつて、練った文章でないことは確かだが、その内容が、三日後に書かれた「公開状日本山口君」⁽²⁾とともに、「広州事情」、「無産階級専政和無産階級的文学」の延長線上にあることは明らかであり、また「訴諸日本無産階級文芸界同志」に繋がる彼の革命志向の明確な決意の表明でもある。

この文章は四・一二クーデターの四日前に書かれたことになるが、それについて錢杏邨は、「このような厳しい情勢の下で、このようにはつきりとしたまたあてこすって（原文：暗射）書かれた文章が、達夫の手から出たものであると誰が信ずることができようか」とその勇氣に対する賞讃と驚きの眼を向けている。

またこの一文は『這樣做』という国民党の発行していた雑誌に「郁達夫先生よしなさい」（原文：郁達夫先生休矣）を書かせることになり、それを読んだ魯迅が、「達夫先生には私は何度も会ったことがあり、何度も話したことがあるが、彼は穩健柔和で、人の怨みを買ったり、いわんや国に害したりするような人ではないと思う。どうして急にこんなに『過激』になったのだろうか。私は『洪水』を読みたくなつた」といわしめたものでもある。

こうした公然と蔣介石とその一派に挑戦した一連の旗幟鮮明な文章を書いたことで、彼はもとより当局からの追求を予期しており、五月二四日の日記には、虹口の書店を二軒尋ね、はつきりと蔣介石の名を挙げて糾弾した「訴諸日本無産階級文芸界同志」の載る予定になっていた『文芸戦線』六月号がまだ来ていないことを確かめた上、「おそろくあすには上海に着くだろう。私の危険時期は多分この十数日の間だろう」と書いている。その一方では、四・一二クーデターのころ検挙されたと覺しい許幸之（創造社の出版物に寄稿している人物）の釈放のために尽力している。

五月二八日には、追及を避けるためとそのころ病んでいた黄疸の療養を兼ねて杭州に身を隠した。案の定、翌日の二九日には出版部が捜査を受けた。そこで彼は自分が日本に行ったという声明を新聞に出してくれるよう上海にあて手紙を書いた。六月八日の日記には、五月三日付の「福爾摩斯」という小型新聞に「郁達夫行きて將に国を去らんとす」と題する記事が載っていることを記しているが、この日付は六月三日の誤りではないかと思われる。六月七日に王独清（彼は五月二日には上海に戻って来ていた）が書いた『創造月刊』七期の編輯後記の冒頭に、「全く意外なこ

創造社脱退前後の郁達夫

とに達夫は心血を注ぎ尽したために、突然旧病再発し、一人で日本へ療養に去った。今期の月刊はやむなく仮に私が編輯に当たった」(圈点鈴木)とあるのは、こうした配慮の結果である。

達夫が上海に戻ったのは、六月二五日である。その前後にも王独清あたりから行動を隠密にするよう警告を受けているから、身边はなお危険であったのだろう。

七月三日の日記(これが『日記九種』の最後に当たる)によると、すでに上海に出て来ていた成仿吾をも含めて、創造社出版部の整理計画が話しあわれたようだ。

夜十時北京支部の件に話が及ぶ。二週間後に北京に行くことになる。一つには家のことを片づけ、安心して国を去り、異国永住の人となることができるようになるため。二つには創造社出版部の事務を全部引き渡し、これから手をひくことができるようにするため。

「異国永住の人となる」などという語が突如として出て来て穏やかでないが、日記にはそれ以上の詳しい内容は記されていない。ただその後に「私は将来に対して、中国に対して、創造社に対して沈痛な深い愁いを抱いている」とあり、日記の「後叙」にも「最後にまたどのように人の中傷を受け、十数年来の旧友が、剣を抜いて向い合わねばならないことになったか、これらについてはあるいは、この日記が私のために説き明かすことができるかも知れない」と書かれていて、この夜の会合で、他の同人との間に、達夫が創造社を去ることになった決定的衝突があったことだけは推察される。そして事実八月十五日付の新聞に「今後達夫と創造社とは完全に関係を脱離す」と書かれた「郁達夫啓事」が掲載されたのである。⁽²⁴⁾

おそらく「広州事情」以来、達夫を仇敵視していた郭沫若は、達夫の創造社脱退をまたも次のように解釈する。

郁達夫の反動が敵しえなかったのは、やはり全中国社会の潮流であり、彼の行動は間もなく反動に甘んじない創造社同人の反対を受け、彼は自ら創造社の隊伍から退出せざるを得なくなり、その上天性に従って創造社を嘲罵することをもって能事とするようになった。⁽²⁵⁾

これを郭沫若が書いたのは、創造社封鎖後さして間もないころと思われ、明らかにそのころの達夫の傾向（それが「反動」であるかどうかは甚だ疑問だが）をもって裁断しているのであることは先の周全平、潘漢年らとの絶縁の時と同様である。また李初梨、馮乃超等が日本から帰国し、いわゆる第三期創造社を結成して『文化批判』を創刊したのは二八年一月のことであって、達夫の創造社脱退後でもある。事實はむしろ郭沫若のいうのとは逆に、達夫が急進的に過ぎたからだという事情が、以下に紹介する達夫の文章に見えるのである。

達夫自身が創造社脱退の経過を書いたものとしては、まず「翻訳説明就答弁」⁽²⁶⁾があるが、これを承けた「對於社會的態度」の中の説明が最も詳しい。それを紹介しよう。

私が創造社と關係を断とうとしたのは、あの軍閥官僚に対してあまりに見かねて、『洪水』に「広州事情」、「在方向轉換的途中」等何篇かの文章を発表したことが原因である。当時の幾人かの旧友は、みな政府の下で職に就いており、私が朝廷を誹謗したとし、こんな文章は書くべきでないとした。その後幾人かの日本の『文芸戦線』社の記者が上海にやって来て、私はまた彼らのために更に鮮明な「日本無産階級に訴ふ」の文章を書いた。これらの文章は、もともと誰もがしゃべりたいあたりまえの話である。しかるに旧友たちはみな私のいい方がひどすぎるといった。つまるところこれらの文章が原因であるのかどうかわからぬが、去年の七月に、突然一人の自称秘密探偵だという司令部の人間がやって来て、創造社へ行って人を逮捕するといった。その結果出版部の人間は

創造社脱退前後の郁達夫

逃げ散って空っぽになり、その後郭復初氏⁽²⁷⁾が司令部へ行っていきさつを説明し、胡適之氏⁽²⁸⁾が黃膺白⁽²⁹⁾に一部始終を弁解し、創造社出版部は私自身が警察庁に出向いてもらい受けて（原文：接受。一旦封鎖されたのを解除されたということか。創造社封鎖の噂は五月九日の日記にも見える。なお創造社は前年、達夫らの留守中にも一度封鎖されたことがあるようである）来た。そしてこの一場の悲喜劇の幕切れのころ、偶々広州から重大使命を帯びて日本へおもむく成仿吾氏が、私に向かつてこういった。

「これはすべて君のあやまちだ。君があんな文章を書いたから、創造社がこんな驚慌と損失を受けることになったのだ！ あんな紙上の空文が何の役に立つのだ。今後は書かない方がいい！」

この警告の結果、成氏のあの親族、現在は創造社の全財産を管理しているあの親族、もともと私の監督があまりに厳しいことを嫌がっていたこの成氏は、⁽³⁰⁾ついに私に対して明らかに反抗的態度を示した。私は前後左右のこうした情勢を見、以後再び文章によって災いを招き、累を創造社出版部の経営に及ぼすことを深く恐れ、そこで昨年八月十五日の『申報』、『民国日報』に完全に創造社と関係を断つという啓事を載せた。これが私と創造社が分裂しようとした事実であって、これによって見ると、創造社諸公が如何に穩健であり自重しているか、如何に現在の革命政府の忠実な同志であるかを極力証明するに足るのである。

五月三十一日に創造社が捜査を受けたことは先に触れた通りだが、達夫がここでいう七月中の秘密探偵云々は、彼の日記には見られない。あるいは日付等で記憶違いがあるのかも知れない。

ともかくも達夫のいう通りではないにしても、これに類した事件は確かにあったのだらう。彼がここで「以後再び文章によって災いを招き、累を創造社出版部の事業経営に及ぼすことを深く恐れ」「創造社と関係を断」ったといっ

ているのは、「郁達夫啓事」の「凡そ達夫の国内外新聞雜誌上に發表するところの文章は當に達夫箇人に由りて責を負うべし。創造社と関わりなし。特に此に声明し、誤会を滋^{*}すを免れんとす」の記述とも附合するから、「広州事情」、「無産階級専政和无産階級の文学」、「訴諸日本無産階級文芸界同志」等を書いた責任を一人で負い、以後は一人で全く自由にものを書いていこうという気持があつて創造社と訣別したのは事実のようだ。それは次章で述べるようにその後の彼の活動とも一致するのである。少なくとも彼としては、同人とのトラブルから、そうした前向きの姿勢にまで自己を駆り立てたことはまちがいない。

ところが王独清は、先に引用した達夫と「番頭」との決裂を述べた後で次のようにいつている。

同様に、私と成仿吾もその後上海で郁達夫と分家した。やはり決して革命の問題ではなかった。郁達夫は当時も何篇かの半可通（原文：似通非通）の無産階級と文学の文章を書いたことがあつたが、その当時にあつては、創造社同人は幾人かの傾向が實際面で郁達夫と同じでなかったほか、理論面では誰も相當の成熟があつたとはいえない。従つて郁達夫との決裂は全く出版部の工作上に基づいていたのである。それはまさしく最初の全上層分子といわゆる「番頭」との分家の場合と同様である。しかしいわゆる「番頭」のサボタージュを、当時上層分子は小組織の關係だと思つたが、郁達夫のサボタージュは、完全に懶惰と野放図（原文：浪漫）のしからしむるところであつた。当時創造社同人は郭沫若がまだ武漢にいたほかは、その他のものはまた上海に歸つており、みんな創造社を發展させようと思つていたから、郁達夫が仕事を進めないことに対してはもとより一樣に不満であつた。——勿論、我々は創造社の何人かの中心人物の間のそれまでの衝突を否認することはできない。しかしその衝突はすべて小資産階級の性癖、つまりいわゆる「文人相輕^んず」の惡習であつた。これもあるいはやはり当時

創造社脱退前後の郁達夫

幾人かが郁達夫と分裂した要素の一つであったかも知れない。

達夫と王独清の書いていることは、食い違っているようで、よく読めばさして矛盾はない。達夫のいっている、自分の活動が創造社に累を及ぼしたくないというのも彼の心情として偽りのないものであるなら、王独清のいっていることもまた客観的事実として否定しえない重みを持つのであろう。王独清の文章の方が後で書かれたのだが、特に達夫のいい分を否定しているわけでもない。二人の言はむしろ相互に足りないところを補完しあうことによって、達夫の創造社脱退の真相を語っているといえよう。

元来達夫と王独清とはつきあいの日も浅く、さして深刻な対立を生む要因があったとは思われない。創造社結成時の郭・郁・成・張の四人のうち、当時郭沫若が上海にいなかったことは、王独清も触れている通りで、張資平も二八年三月になってようやく武昌から上海に出て来る。結局は達夫の書いているところからも窺えるように、彼が剣を抜じて向かい合うことになった旧友というのは、とりわけ成仿吾を指しているはずである。二人の間に、達夫と王独清が述べているような問題で決定的な対立・衝突があった。その結果達夫の脱退ということになったのであろう。いづれにしる郭沫若のいう「反動に甘んじない創造社同人の反対を受け、彼自ら創造社の隊伍から退出せざるを得なくなった」ものでないことはもとより明白である。

それにしても結成以来の中心メンバーとして活躍してきた創造社からの脱退に踏み切るには、よほどの決心を要したはずで、それだけにそれは、「異国永住の人となる」といった逃避的心境から一転、彼に新しい活動の新天地を自覚させることにもなったのである。

“旧友”と衝突し、創造社を去る決心をした達夫は、最初国外（日本）へ出ようと考えたらしい。そのことについては前章に引いた二七年七月三十一日の日記のほかに、翌日八月一日に書いた「鶏肋集題辭」にも「秋風の到来を待つて、海を越えて東遊し、遠く故国を離れて、静かに人生を觀察し、孜々として自分の仕事を完成させたいと思う」と重ねて述べられている。彼の傷心がいかに大きかったかを物語っているよう。

しかし八月十四日の「日記九種後叙」、翌日の新聞に発表された「郁達夫啓事」には、すでにその気配は見られない。激情の冷めた後に、冷静に自分の進むべき道を考える余裕が生じてきたのであろう。ともかく翌月の二日には「民衆発刊詞」を執筆するに至るのである。これは創造社を脱退した以後の達夫が自分の針路を明確に示した第一声である。

そこで彼は、大要次のように述べている。

中国の目下の民衆は少しの勢力も意気もない。大通りに見られるのは軍人であり役人であつて、民衆の事がないや民衆の存在はどこにも見られない。

しかしこれら軍人や役人の乗物は誰が運転し、誰が作り、彼らの米や野菜は誰が栽培したのか。労働しているのは誰なのか。一挙一動にも税金や献金を取られるのは何のためなのか。

目下の中国では、社会の意識の上では民衆の存在はなく、利益享受の上でも民衆の分け前はない。しかし社会

の最下層で常に圧迫され搾取されているのは民衆である。

多数の民衆の受ける苦しみ、圧迫は革命以前より加重された。彼らは苦しみを受けながら叫ぶことができず、目前に危険、困難があり、搾取を受けても、敵が何であるかを見分けることができない。

我々幾人かは嘘をいうことや醜惡を隠すことを知らぬ純真な子供である。我々は微かな視力とよく廻らぬ舌で、見たところ、聞いたところ、受けたところを赤裸々に叫ぼうと思う。

我々は圧迫された、搾取された民衆の一分子であるから、我々の叫びが公平率直なものであると信ずる。我々は民衆の酔夢を呼び醒まし、民衆の地位を増進させ、民衆の革命を完成させなければならない。

我々大多數者は被圧迫者であり、将来の大革命の創始者である。革命的民衆よ、団結せよ！

ここに述べられた趣旨が、これまた「広州事情」、「無産階級専政和无産階級的文学」、「在方向轉換的途中」などに書かれた内容と同一延長線上にあることは明白であろう。とすると、自分の活動が累を及ぼさないようにと、はつきり創造社との絶縁を表明した達夫が、その言に違うことなく、ここに誰にも遠慮することのない自由な活動の新天地を開拓すべく、決意も新たに自ら雑誌を創刊したという事情が浮かび上ってくるのである。

ところで、この「民衆発刊詞」は『奇零集』に収められていて、容易に見ることができるが、『中文期刊聯合目錄』によって『民衆』（旬刊）そのものについて調べると、次のようなことが判明する。すなわち、上海民衆旬刊社発行、二期までの発行と発行年代が一九二七年であることが確認され、所蔵する機関は廈門大学図書館だけでありそれも二期のみである。これが発行場所、発行年代からして達夫が発行した雑誌であることはまちがいあるまいが、いずれにしろ、この雑誌は中国にあっても極めて現物を見るのが容易ではないらしいし、従ってその全容もほとんど分明では

ないのである。

ところが、『中国現代文芸資料叢刊・第一輯』⁽³¹⁾中の紀文の「魯迅著訳系年目録(上)」によると、『而已集』に収録されている魯迅の「革命文学」は、一九二七年十月二日発行の『民衆旬刊』第五期に魯迅の署名で載ったことになっている。そうすると、『民衆』は五期まで発行されたことは確実であることになる。

一方達夫自身の書いたものとしては、『民衆発刊詩』が当然創刊号に掲載されたものと思われるほかは、一切不明であった。

しかるに、『奇零集』の「題辭」には、この集に収められたものは、大抵すでに『洪水』、『民衆』、『創造』、『晨报増刊』、『小説月報』上に発表された、と書かれている。そこでも、『奇零集』所収の作品で、原載誌の判明しているもの、執筆年月のずれるものを省いていくと、『民衆発刊詞』のほかに、「題辭」のすぐ後に並べられた四編、すなわち「誰は我們的同伴者」(執筆は二七年九月二日)、「鄉村裏的階級」(同九月十四日)、「農民文芸的提倡」(同九月三日)、「農民文芸的実質」(同九月十四日)は、執筆年月日から判断して『民衆』に掲載された可能性が強い。⁽³²⁾

一応手順として右のような考証を試みたが、何よりもこの四編はその内容が、『民衆発刊詩』で達夫が述べているところと符合するから、すべて最初は『民衆』に載せられたものであることは、まず確実である。また卷末に附せられている、若い農民夫婦の健康な農耕生活を描いた「初次的播種」⁽³³⁾も十月二八日に翻訳されたものであり、これに載ったか、少なくともその意図で翻訳されたのであることも、ほぼ確かである。これも登載されたとすれば、『民衆』の発行期数は六期までは延びることになる。

それでは、この四編ではどんなことが書かれているのか。

「誰は我們的同伴者」は、前半で要旨次のように述べられている。

十六年来の革命で得たものは何であるか。命は極めて手軽に奪われ、帝国主義国家にすら存在する言論・出版・集会・結社の自由はない。租税は人民の同意がないのにその負担は重くなる一方であり、人民には政治に参加する手だてというものがない。

革命の結果、人民の苦難が軽減されたであらうか。これらの失敗の原因は、我々が同伴者を見分けることができず、その同伴者に売られたことによる。自分たちの膏血で養成した軍隊は、現在では民衆を圧迫するようになった。従って軍隊は同伴者ではなく、革命をしようとすれば、自分たち自身の力に頼らなければならない。

革命には指導者が必要だが、投機が成功すると、彼らは役人になるのを事とし、自由、解放に反対するようになる。そこで、権力を少数者に集中させず、政権を大多数者の許に奪い返さねばならない。

ここまでに述べられている内容は、『洪水』などに発表された一連の文章のそれとほとんど変りなく、その繰り返しに等しいが以下の重要と思われる箇所を次に抜き出してみる。

我々はなお帝国主義者と資本家を背後に持っている。従って我々には武器もなければ金銭もない。我々の所有する唯一の武器、それは多数である。そしてこの我々の多数中の多数は農民である。中国自身の資本主義はまだ発達しておらず、従って中国各都市の資本主義式工場で働く労働者は、外来の資本主義（すなわち帝国主義）を打倒する用に足るのみであり、中国の新旧軍閥とこれら軍閥のしっぽに附属するかの新旧官僚政客と投機師の類は、農民が立ち上って彼らを打倒しなければならない。孫総理の提唱した農工政策が、農の字を初めに置いたのは、偶然ではないと思う。中国も農業をもって国を立てていることは、誰もがいうことであり、中国の農民が、

中国社会を構成する中心的階級であることは、誰もが承認することである。しかるに、現在に至るまでの各期の革命運動の中で、農民がこれまで中枢となったことはなかった。私はこれが我々の革命が失敗した一つの大きな原因であると考ええる。

もとより農民、労働者は団結しなければならないものである。中国の外來帝國主義が打倒されなければ、中国の新旧軍閥と新旧政客官僚は打倒できない。しかし「我々の唯一の武器は多数である」にもとづいていうなら、我々はこの武器に対してあまりに不注意であつたことを免れないと思う。

労働者の組織は、各工場がすべて外国帝國主義の色彩を帯びているので、その完成は容易であることを知らねばならない。ただ、中国の農民は、国情が異なり、圧迫をあまりに長く受けすぎたために、彼らの自發的組織は、非常に困難である。しかしエンゲルスが一八九四年にいったことを我々はいま引用できる。人口中の膨大な大衆（農民）の政治に対する無関心は、政治、社会を墮落させる最大原因である。しかし、しかし（原文：可是、可是）これは決して救うことができず、征服できないというものではない。我々が革命をしようとするなら、彼らを我々の同伴とせねばならず、それはただ我々の宣伝と努力の如何によるのである。

「鄉村裏的階級」は、「誰是我們の同伴者」を承け、中国のような封建勢力が強く、資本主義の未発達な国家では、有産者と無産者が闘争する時、その成敗の決勝点は、多数の農民の帰趨にあるとする。そして農民という階級の中にも、經濟的地位の相違する階級があり、農村革命を扇動しようとするなら、この階級をはっきり見きわめ、各階級相應の宣伝をしなければならないという。しかる後に達夫は、農村の階級を、(一)無産労働者、(二)自立小農、(三)中農、(四)大地主の四つに分け、中国の農村の中で多数を占める(一)と(二)の二層は自分たちの同伴者であり、十分合作の可能性が

あり、この連合戦線が成立すれば、ごく少数の大地主と資本を擁するものを打倒するのは極めて容易であると述べている。

「農民文芸的提唱」、「農民文芸的実質」は右二編の評論中に述べたような、農民の中国革命における重要性に鑑み、彼らを自覚させ、革命の同伴者とするための手段として、農民文芸を提唱し、その内容を具体的に説いたものである。

「農民文芸的提唱」の中で要点と思われる箇所を抜いてみる。

農民と文芸ということになると、従来関係は極めて浅く、とりわけ中国にあっては、文芸は貴族と準貴族の娯楽品であり、農民は自ら彼らの文芸を創造できなかったばかりか、たとえ彼らのために創造する人があっても、彼らはやはり鑑賞できず、感泣できなかった。従って中国の文章の中に、農民に関する文学は極めて少ない。論者が常に陶淵明の詩辭、范成大の田園雜詠等を中国農民文芸の代表とするのは、実に話にならないのである。

現在我々の社会を構成している分子は、遊惰な資産階級、兇猛な軍人階級そして辛苦する労働者階級のみでなく、これらの階級のほかに、農民階級が最大多数を占め、最大に優勢である。しかるに、我々中国の新文芸は、資産階級の墮落を描写したものはあり、軍人の横暴残虐を諷刺したものはあり、労働者に代って不平を訴えたものはあるが、ひとり農民の生活、農民の感情、農民の苦しみは、これを描いたのを見ない。私はこの点は我々の新文芸の恥辱であると思う。

軍閥、土豪、劣紳の圧迫下の農民、その彼らの苦しみは決して都市無産労働者の下にあるものではない。彼らの階級感情、革命精神は、ただ一般の被圧迫者の上を行くのであって、決して黙々として無言のままではありえ

ず、訴えるべき不平がないことはありえないのである。私が思うに、中国の新文芸の中に、偉大な立派な農民文芸が出なかったのは、一半は農村教育の未発達にあり、一半はおそらく提唱する人がなかったことによる。

革命運動が緊急とされる現在、私はこの工作は、必ず良い結果を収めると思う。私はみんなが注意を払って、この泥土の文芸、大地の文芸を提唱することを希望する。

「農民文芸の実質」では、初めに農民運動・農村革命における農民文芸の効用を説き、次いで農民文芸の内容、つまり農民文芸の実質を、以下の四つに分けて説明している。(一)農民の生活状態がいかに素朴であり、いかに悲惨であるかを客観的立場から述べた文芸。(二)農民のために訴え、農民のために叫び、完全に農民のために書かれた主観的立場の文芸(従って農民か、農民生活に十分関係のあるものが書いた正統的農民文芸)。(三)資産階級の都会文芸と相對立した地方的色彩のある農民文芸。(四)農民を自覚させ啓発する知識文芸。

達夫はまたここで、たとえ農村の出身者でなくとも、熱烈な感情と正確な意識を持ち、すべての経験、理想、不平を完全に腹藏なく述べれば、最も良い農民文芸はすぐにも成立しようといっている。これは同じ年の八月に書かれた「五六年来創作生活的回顧」の中の「『文学作品はすべて作家の自叙伝である』というこの一句は、千真万真である」ということばと矛盾するようだが、彼はそうした自己の経験にもとづいた作品を正統とした上で、なお「筆を下す時、自分が農民のために努力し、自分が現在の社会の虐待された農民であると自覚」さえすれば、それはそれで(一)の如き客観的農民文芸は書けると考えているようである。

達夫はこの後で、ポーランドの「農民詩人」レイモンツ(W. S. Reymont)の『農民』(一九二四年ノーベル文学賞受賞作)を実例として挙げ、かなり長い紹介をしている。

創造社脱退前後の郁達夫

達夫が雑誌『民衆』を発刊し、右に述べたような評論を書くという活動をしたのは、繰り返して言えば、中国革命の中核となるのは民衆、とりわけ圧倒的多数を占める農民であるという認識の上に立って、彼らに働きかけ、自覚を促そうとしたからである。彼がこうした活動をしたのが、一九二七年九月から十月にかけてであるという事実注目したい。

一九二七年といえば、四・一二クーデターの後、当時中国共産党総書記であった瞿秋白が、都市プロレタリアの武装暴動によって、その権力を奪取するという路線を採って失敗したところである。同じく都市におけるプロレタリアの武装蜂起による「一省ないし数省の首先勝利」というテーゼを唱えた李立三コースが確立するのは三〇年である。これに対し「農村によって都市を包囲する」という農村、農民を重視した、瞿秋白や李立三とは全く正反対の方式を採って中国革命を成功に導いた毛沢東が、有名な「湖南農民運動考察報告」を発表したのは、二七年三月である。「一切の帝国主義、軍閥、腐敗官吏、土豪劣紳はすべて彼等（農民——鈴木）によって最後には墓に葬り去られるだろう」とここで書いた彼が、共産党中央の長沙攻撃の命令に抗して井岡山に入り、その責任を問われて、政治局員候補と前敵委員会書記の任を解かれたといわれるのは、同年十一月である。

まさしくそのような時期に、郁達夫がこのような評論を発表していたことは、実に驚異的ではなからうか。「いまから約半世紀まえ、およそマルクス主義を信奉し、共産党を名のる運動において、工場労働者による都市権力の奪取という方式のなかにその基本的路線を見出さないものは、たぶんだれ一人としてなかったであろう」という状況⁽³⁴⁾を考えあわせれば、彼の中国革命に対する認識の鋭さとの確さに今更ながら驚嘆するほかないのである。

達夫が同時代の中国のどの作家よりも早くこうした認識を持ちえたのは、彼がまた誰よりも早く近代科学としての

経済学を学んでいたことによるのは明白であり、見落してはならない点である。⁽³⁵⁾しかし、当時の正統的マルキシズムでは、先の野村氏の引用文でいうように、ロシア革命方式、つまり都市プロレタリアが武装蜂起して権力を奪取する、を信奉し、農村農民を重視していなかったといわれている。その中であって達夫が「中国各都市の資本主義式工場で働く労働者は、外来の資本主義（すなわち帝国主義）を打倒する用に足りるのみであり、中国の新旧軍閥とこれら軍閥のしっぽに附属するかの新旧官僚政客と投機師の類は、農民が立ち上って彼らを打倒しなければならぬ」という認識に達し得たのはなぜか。それは経済学を学んだことの上に、彼の自伝に述べられている如く、彼の郷里富陽は一步城外に出ればそこは農村であるという土地で、農民の生活をよく観察し得る機会に恵まれていた、そのことに由来するものと私は思う。

ところでこの時期の達夫に、このような刮目すべき活動を始めさせたものは何であったか。私はそれを次の三つの原因によるものと考ええる。(一)創造社の「老友」と衝突した傷心と憤懣を新しい飛躍の発条としたこと。(二)王映霞との愛が成就し、未来が信じられるようになったこと。⁽³⁶⁾(三)魯迅の「上海文学之一瞥」中の「ですからこの革命文学が盛んになって来たのは、表面上はほかの国と異なり、決して革命の高揚によるものではなく、革命の挫折によるものです」という有名な指摘が達夫にも適用されること。

さてそれでは、この『民衆』という雑誌はその後どうなったのか。中国においてすらこれを所蔵している研究機関がほとんど見当たらないというところに、この雑誌のたどった運命が象徴されているよう。この雑誌が停刊になった理由は、おそらく極めて単純過ぎるほど単純である。当局から停刊処置を受けたというようなものではないはずである。もしそうであるなら、この雑誌はいま少しその名を知られていたに違いない。単純すぎるほど単純な理由というの

創造社脱退前後の郁達夫

は、つまり商業ベースに乗らなかったのである。達夫が『洪水』あたりで、いつてみれば勝手な熱を上げることができたのも、創造社という母体があったからこそである。それがその後楯を失い、上海民衆旬刊社などという全く無名の出版社を興し、そこで達夫が孤軍奮闘してみたところで、たとえ魯迅という強い援護を受けても、なおかつとてもそれを維持していける道理のものではなかったであろう。その結果六期あたりまで発行されたのみで、うたかたの如く消え失せてしまったのであろう。創造社を飛び出した達夫が、勢いよく振り上げた拳の、そのやり場に困っているという情景が目に見えよう。

達夫はその後、魯迅と協力し、彼が編集していた『語絲』や『奔流』に寄稿する。そして二八年九月、今度は大手出版社(?)の現代書局から、『民衆』の鋭鋒をいくらか鈍らせた形で『大衆文芸』を創刊する。それらの活動の内容やその意義については、また別の機会に探っていききたい。

これまで述べて来たような活動を、達夫がこの後も継続して「左聯」に至り、そこでもしかるべき働きをなしたとすれば、彼は革命的文学者としてその名を中国文学史に記されることになったはずだが、そうならなかったのは周知の通りである。その辺りの事情を調べるのも今後の課題として残しておきたい。しかし、本稿の冒頭に名を出した達夫をよく知る山口慎一氏が次のように述べているのを最後に引いてひとまず結びとする。

「私は声を大にして誇りたい、中国の将来は無産階級のものである。中国の文学もまた無産階級のものである……」

「我々の不平と攻撃は、プロレタリアのブルジョアジーに対しての不平、攻撃である。我々の喜び、怒りは、プロレタリアがその深処において感ずる喜び、怒りである。」⁽³⁷⁾

彼が予想したところ、それがいま、中国で実現しつつあること——それを思うと、彼にして生きて在らば、その感慨こそまさに深大であろうと、私は思わざるをえない。

その後の彼の、農民、農民文学への注目、提言も偉とすべきものであった。「誰は我們的同伴者」「農民文学的提倡」「農民文学的実質」などの論文を見るがよい。——これまた、彼の見通しの正しかったことがいま実証されつつある。⁽³⁸⁾

(一九七五・八・三一)

注

(1) 一九二七年から一九九年まで上海で郁達夫と親交のあった山口慎一氏が、「私は一九二五年の春から一九九年の春まで上海にいた。それはまさに中国の疾風怒濤時代であった」と書いている。「疾風怒濤時代の郁達夫など」、「大安」一九五八年十二月号。

(2) 『鶏肋集題辞』一九二七年八月一日執筆。

(3) 『通信』(『三閑集』所収)。

(4) 『革命文学』(『中国文学雜考』大安、一九六七年三月刊所収)。

(5) 中国語で書いたものに達夫自らが訳文を附している。いまその訳文を転載したが、原文の中文に九字、訳文の日文に十三字の伏字があるので、日文が伏字で中文が伏字になっていないものを照合して、日文の伏字を×印を横に附して埋めてみた。残り七字の伏字のうち初めの二字は中日両文とも「革

命」、後の五字は中文「的專政世界」、日文「独裁の世界」と推定される。

なおこの声明文は『文芸戦線』の特派員、小牧近江・里村欣三両氏の依頼で書いたもの。その間のことについては、同誌に二人の特派員が寄せた「青天白日の国へ」及び達夫の四月二十八日の日記に書かれている。

(6) 『洪水』二八期に載ったようだが未見。

(7) 『再談郁達夫』(一九四七年十月十八日執筆、『天地玄黄』新文芸出版社、一九五七年十月刊所収)。

(8) 『北伐途次』(『革命春秋』所収。『沫若文集』第八卷、人民文学出版社、一九五八年九月刊による)。

(9) 『創造社我和牠的始終与牠底総賬』(黄人影編『創造社論』光華書局、一九三二年十月刊所収)。

(10) 故岡崎俊夫氏の解説。『現代中国文学全集』第十四卷「短篇集」河出書房、昭和三十年七月刊所収。『中国現代文学選

創造社脱退前後の郁達夫

集』5「郭沫若・郁達夫集」平凡社、昭和三十七年十二月刊及び『中国の革命と文学』3「郭沫若・郁達夫集」平凡社、昭和四十七年一月刊にも郁達夫については同じ解説が採用されている。

(11) 駒田信二氏の解説。『現代中国文学』6「郁達夫・曹禺」河出書房新社、昭和四十六年十二月刊所収。

(12) (9)に同じ、以下王独清に関する引用はすべて同じ。

(13) 創造社出版部については、『洪水週年増刊』(一九二六年刊)の巻末に載せられた「創造社出版部第一次營業報告」に詳しい。それによると、出版部營業課の業務は一九二六年三月一日に開始された。そしてそれまで光華書局から発行していた『洪水』を回収し自ら出版するようにしたという。

同書に取められた周全平の「關於這一週年的洪水」によれば、出版部を組織することになった動機については、かなり前からその意向を持っていたが、『洪水』四期を発行したころ、これを実現させたいと思う欲望が強烈に襲ってきたという。そしてその原因については次の三点をあげる。(一)自分たちの出版機関がないのは不便である。(二)多くの未知の友人たちの勧め。(三)最大の原因は、自己の「事業欲(原文:辦事慾)」が忽然として盛んになったこと。

また同書には、「創造社出版部章程」が記載されているが、その総則には第一条「本出版部は創造社が発起した組織であ

るので創造社出版部と名づける」、第二条「本出版部組織の目的は出版界の悪習を打破し、社内外の優良刊行物発行の便利を謀るにある」などである。またこの出版部は株式制をとり、第一期の理事の名簿は次のようになっている。

理事会主席 郭沫若
常務理事 成仿吾(會計兼總務)

理事 王独清(編輯)

理事 郁達夫

張資平

周全平

周靈均

穆木天

そして先の周全平の文章によれば、出版部が營業を始めたころのスタッフは、彼のほかには、梁預人、周毓英、葉靈鳳の三人がおり、間もなく潘漢年と桜島が加わり、一時柯仲平も手助けしたという。もつとも柯仲平は魯迅の記すところによると、後に内部の紛糾で追い出された(『阿地書』五〇)。

そのほかに洪為法も加わったようである。

(14) 『洪水』一二期に編者(周全平)の手になる編集後記「只有兩次了」が附せられてあって、そこに次のようにその間の事情が説明されている。

創造社出版部の番頭(原文:夥計)はすべて青年であ

る。青年は感情的である。興の来たる時は話がしたくなりひとつの出版物がなければならぬと思う。しかし興の湧かない時無理に文章をひねり出すのも一様に苦痛である。そこで『A11』を出した。一つには、偶々出版部が「公報」を発行する準備をしていたこと、二つには、自分たちの『洪水』がしだいに規格的になって、そこで語るには都合のよくない多くの話があること、そこで『A11』を刊行した。しかしかわいそうな『A11』はついに××（これが何であるか、みなさんあてて下さい）の干渉によって停止になった。そこで『幻洲』が出て来た。

二字分の伏字××のところへ何が入るのかよくわからない。引用した部分の後の方を読むと、何か登録の仕方にも問題があったらしい。とすれば、「当局」か「政府」とでもいう語が入るのであろうか。『A11』という妙な雑誌名の由来は、出版部が上海宝山路三德里A11号にあったからであろう。この雑誌は二号程出たらしいが、北京図書館出版（一九六一年）の『全国中文期刊聯合目録』にも見あたらない。『幻洲』の方は、同書によれば、半月刊で、上海幻洲編輯部発行、一期から二巻八期（一九二六年十月〜一九二八年一月）まで刊行されたことになっている。

(15) 次のような理由が考えられる。(一)達夫はかねてから創造社の活動の中心的存在であったこと。(二)『創造月刊』五期に載

北大文学部紀要

せられた達夫の「非編輯者言」（これは二度めに広州に行く直前上海で書いたもの）の中で、他の同人がみな実際の革命事業に携わるなら、冬休みには上海に帰って来て、専ら出版編輯の仕事をする、それが自分の如き「老廃残疾」のものに最も適しい生活だと述べていること。(三)「経済学士」としての經理能力を買われたこと（達夫が広州を留守にしている間に、広東大学は機構が改革されて名も中山大学と改められ、彼が新しく担当したのは、大学の出版部の事務であった）。

(16) どのように解決したのか、ともかく『幻洲』は、(14)で触れた如くその後も発行が続けられた。

(17) 「對於社会的態度」(『北新半月刊』二巻十九期、一九二八年八月刊所収)。

(18) 『新消息』創刊号、一九二七年三月。

(19) 「創造社的自我批判」(黃人影編『創造社論』所収。一九三〇年か三一年ごろの執筆と思われる)。

(20) 前引『全国中文期刊聯合目録』によれば、『新消息』は月刊で一九二七年三月に創刊され、同年七月まで七期続いた。

(21) 『洪水』三十期。山口慎一氏が三月二十五日付『上海毎日新聞』文芸欄に載せた達夫への公開状に対して答えたもの。達夫個人の心境の変化、創造社の目下の潮流での取る態度、無産階級文学に対する意見の三点についてそれぞれ述べられている。この文章は全体に極めてラジカルな強い調子で貫かれ

創造社脱退前後の郁達夫

ている。彼はここでも、一人二人の帝國主義者や資本家を打倒するのは容易だが、利己的野心を抱いた中国民族の卑劣陰險性を打倒するのは容易でないと述べ、自分が南方から上海に帰って来たのは、一管の筆によつて、この墮落した人心を挽回せんとするためであるといっている。また日本の文学と中国の文学との違いに触れて次のように述べているのは、注目ししよう。

中国では新文学運動が起こった時、文学に従事した知識階級は、みなすでに無産者となつていた。こうした中国のような無産国では、有産階級の人数は本来極めて少ない。その上この階級——大抵は軍閥官僚及び外国資本家と帝國主義者の走狗である——の中には、断じて新文学者を生み出しえない。なぜなら新文学が起こった時には、既成階級——つまり少数の有産階級——と宣戰の使命を帯びていたからである。いわんや現在の中国は思想革命の時期はとつて過ぎ去り、すでに無産階級独裁の時代に入らうとしている。私は思うのだが、将来中国にもしも文学がないならそれまで、中国にもしも文学があるとすれば、必ず現在一般の人が言うところの無産階級の文学であり、断じて日本のような有産階級を謳歌する文学は発生しない。

このすぐ後に達夫は「括弧づきで次のように書いている。
「中国の将来は無産階級のものであり、中国の文学もまた無

産階級のものである。なぜなら有産階級の足跡は、中国においては絶滅しようとしているからである。」

(22) 「達夫代表作後序」(『現代中国文学作家』第一卷、上海泰東圖書局、一九三〇年刊所収)。

(23) 「怎么写」(『三閑集』所収)。「這樣做」は見る事ができないが、魯迅の記すところによれば、達夫が今回の革命は階級闘争理論の実現だといったのを、その記者は、民族革命の理論の実現だと受取り、そのあげく「やめなさい」というに至つたのだという。

(24) 郁達夫はこの啓事を『申報』と『民國日報』とに載せたといっているが、私の見る事ができたのは、東京大学東洋文化研究所東洋学文獻センター所蔵の『申報』のマイクロフィルムである。一面の下端に「郁達夫啓事」という見出しがあり、その下に本文が三行割り収められている。参考までに原文を掲げる。

人心險惡公道無存此番創造社被人欺詐全係達夫不負責任不先事預防之所致今後達夫与創造社完全脫離關係凡達夫在国内外新聞雜誌上所發表之文字当由達夫個人負責与創造社無関特此声明免滋誤會

(25) (19)に同じ。

(26) 『北新半月刊』二卷八期、一九二八年二月刊。執筆は二八年二月十四日。

(27) 郭復初(泰祺)は当時国民政府の外交部次長をしていたはずである。後に駐英大使、外交部長を歴任。達夫とは親しかったらしく、『日記九種』にしばしばその名が見える。

(28) 当時達夫が、胡適に限らず、徐志摩、陳源ら新月社系、現代評論社系の文人とかなり頻繁な交渉のあったことは『日記九種』から知りうる。郭沫若はそれに関して「創造社の自我批判」の中で次のように述べている。

郭は内部に対して清算的態度を取り、外部に対しては彼の妥協的手腕を発揮した。彼は一方では創造社の編輯委員をしながら、別の一方ではまた胡適之を主席とする新月會議に参加していた。後には更に『小説月報』に「二詩人」という小説を書いて創造社同人を嘲罵した。そのころ一群の郁達夫の編輯した『洪水』を読んだ人は、異口同音に、これは創造社の『現代評論』化だ、といった。

この後に、先の「郁達夫の反動が、敵しえなかったのは」云々という引用文が続くのである。達夫が新月書店を訪れたことは日記に一度見えるが、會議に参加したかどうかは不明である。多分参加はしなかったであろう。達夫が『新月』に寄稿したのは、杭府中学の同級生である徐志摩が飛行機事故で亡くなったのを悼んで書いた「志摩在回憶裏」一篇だけである(四卷一期)。

また『現代評論』には二四年から二六年にかけて九回ほど

北大文学部紀要

寄稿しているが、二六年十二月発行の四卷九十期を最後に原稿は載せていない。そして二七年七月三十日の日記には、「通伯(陳源)のところへ行つて現代評論社の會議を傍聴する。彼らはみな新興官吏階級だ。私は以後決して出席しないことにする」とある。

従つてこれをもつても、達夫を反動の証拠とするのも無理がある。なお右の引用文に「二詩人」が『小説月報』に載つたというのは、『北新半月刊』(二卷十期、一九二八年四月発行、原題「到街頭」)の誤り。この小説のモデルについて、増田渉氏にこれの収録された『薇蕨集』を送つた魯迅は、氏あての書簡の中で、王独清と馬某だといつている(増田渉『魯迅の印象』角川書店、昭和四五年十二月刊所収)。ところが郭沫若は、この小説が発表される直前に日本に亡命したため、直接見る機会を當時は得なかったものか、自分がモデルにされたと思つているふしがある。

(29) 黄膺白(郭)は当時どのような官職にあつたのかははっきりしないが、達夫の文章からは警察畑にでもいたのかとも思われる。この直後外交部長に就任。

(30) 成仿吾の甥だという成紹宗を指すと思われる。

(31) 上海文芸出版社、一九六二年五月刊。大安、一九六六年九月影印。

(32) 『民衆』(旬刊)第五期が十月二一日に発行され、それまで

創造社脱退前後の郁達夫

順調に発行され続けていたとすれば、創刊号は九月十一日に発行されたことになり、「誰は我們的同伴者」等の執筆年月日と時間的につつまが合う。

- (33) アイルランドの作家、Liam O'Flaherty 作。原題：Spring Sowing

- (34) 野村浩一『中国の歴史』9「人民中国の誕生」講談社、昭和四年四月刊。

- (35) 郁達夫は大正八年九月、その年に法学部経済学科から独立した東京帝国大学経済学部に入學した。同じ年に入學した有沢広巳氏が、その著書「學問と思想と人間」(毎日新聞社、昭和三年四月刊)で述べているところによると、当時の経済学部のスタッフとして次のような人々があつた。森戸辰男、大内兵衛、樺田民蔵、樺田保之助、舞出長五郎、糸井靖之、渡辺鏡蔵、上野道輔、森莊三郎、金井延、山崎覺次郎、矢作栄蔵、河津暹、高野岩三郎。入學した一年目に森戸事件が起こり、森戸、大内兩助教授は大學を去るが、第二學年には、吉野作造の「歐洲動亂史論」、第三學年には、河合榮治郎の經濟学史の講義を聞いたと記されている。ここに挙げた人のうちには、後にマルキシストあるいはリベラリストとして名を知られた人が多い。有沢氏の書には、「なんといつても新學部を背負っているのは若い先生方で、この若い先生が學部活動の中核をなしていて、非常にはつらつと清新の氣に満ちていた」という当時の經濟學部の講義内容や雰囲気がか

- なり詳しく回想されている。また大内兵衛氏の『經濟學五十年』(東京大學出版會、一九七〇年一月刊)及び『實力は惜しみなく奪う』(文芸春秋新社、昭和四十年十一月刊)も当時の同學部の様子をよく伝えている。郁達夫自身は「五六年来創作生活的回顧」の中で、大學時代は授業は寛やかで、毎日小説を読む暇には、「咖啡館」へ行つて娘さんを追つかけ酒を飲み、誰も勉強しようなどと思わなかつた、と書いているが、後に北京大學の統計學の講師として招かれたりしたことを考えると、にわかには信じがたい。有沢氏が述べるような雰囲気の中で、學ぶべきは學びとつたのではないだろうか。

- (36) 「鷄肋集題辭」に次のようにいう。

「一九二六年末、上海に帰つて来て閑居すること半年、ますます陰險になる軍閥の陰謀を見、私に叛いて去つた友人の私信の苦味を嘗め、元來は落ちるところまで落ち、和尚になれないのなら、大江に沈んでしまふべきところであつた。しかしこの前後に外來の助力を得、私の靈魂、私の肉體をすっかり救つてくれた。この助力に対する感謝は、筆墨によつては銘記せず、後半生の行為、思想によつて表わそうと思う。現在に語るには及ばない。つまりは暗黒の中に半生を摸索して、私はいま光明のゆく手を見出したかのようだ。」

- (37) この二つの引用文とも、「公開狀山口君」からのもの。

- (38) (1)に同じ。